書評

國分功一郎（著）

中動態の世界
―意志と責任の考古学



山根　寛
（「ひとと作業・生活」研究会，元京都大学教授）

たとえば事故で手を失った人がいる．その人は義手を使うのか使わないのか，使うとすれば装飾義手なのか作業義手なのか．あるいは，理解されにくい病いである精神障害と診断された人がいる．その人は，職探しで自分の病いを開示するのかしないのか．

このように作業療法の臨床においては，治療・支援に当たる者も，治療・支援を受ける者も，いずれもがその「意志」が問われる．そしてどちらかを選択した時点から，選択したことに対する「責任」が生まれる．

しかし，ここにいくつかの疑問が生まれる．

まず，ここで選択されたことは，はたして本人の主体的な意志によって「能動的」になされたのだろうか，あるいは専門職の意図を汲むというかたちで「受動的」になされたのではないだろうか．

私は，病いや障害を生きる人たちの生活の建て直しに携る者として，いつも「その人が本当にそうしたのか，私がさせたのではないか」と自問自答してきた．従来の医学的治療のような「施す」という一方的なかかわりでは，対象者の生活の支援は成り立たないからである．

冒頭に示した例でいえば，「対象者の心身の機能を補うには装飾義手より作業義手のほうがよい」とか，「就労するなら精神障害であることを開示したほうがよい」と客観的状況から判断されたとしても，それをそのまま対象者の支援方針や支援目標にすることはしない．私にできるのは，専門職としての客観的な判断とその理由を正しく説明することだ．

他人からはわかりにくい「手」がほしいと望む人には，私は，その人に合った装飾義手の使い方を教えるだろう．しかし同時に，その義手を使うことのメリットとデメリットも説明する．病いや障害を開示しないで職を探したいと願う人には，どのような仕事があるかを共に探すだろう．それと同時に，開示しないことのメリットとデメリットも説明する．

＊　　＊

さて，このような密接なかかわりの中で対象者が下した決断は，能動的なのか受動的なのか？　いや，そのような共同決定を「能動/受動」の枠組みでとらえること自体がおかしいのではないか？

そもそも選択という結果に至るには，それまでの経緯や環境，そのときの心身の状態等，背景にはさまざまな要因が重なっている．本書を読んでいると，セラピストなら誰でも知っているこの「あたり前の事実」に再び目を開かせられるだろう．背景が違えば，まったく違う方向の選択がなされることもある．要するに「意志」というものは，絶対的なものではないのである．

病いや障害を生きる人たちは，いつも障害を受容「する」，「させられる」というストレスフルな問題と共に暮らしている．しかし，障害の受容の問題は，能動態とも受動態とも異なり，その中間というよりそれらの外側にある．

その状態について述べたものが本書『中動態の世界』である．きわめて高度に哲学的・言語学的思弁であるが，読んでいると臨床の状景が浮かんでくる．先に第16回小林秀雄賞を満場一致で受賞したことも納得できる．

＊　　＊

この本の帯には「失われた『態』を求めて」とある．著者，國分功一郎は「誰も気にかけなくなった過去の事件にこだわる刑事のような気持ちで」中動態のことを想い続けていたという．本書は，いま私たちが意識しなくなった中動態という概念について，知り得たことをまとめた1冊である．本書を片手に，中動という「失われた態」の埋もれた足跡（そくせき）を自分の足でたどってみるとよい．

A5判　344頁 2,000円＋税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650

©MIWA-SHOTEN Ltd, 2018

0915-1354/18/紙：￥500/電子：￥1,200/論文/JCOPY

2026/11/11 09:44:03